



平成 31 年 4 月となりました。元号が変わりますが、1000 年前の元号は寛仁で西暦 1017 から 1021 の間です。平安時代の藤原道長、頼通親子の摂政・関白の時代でした。ちなみに、この 2 人も寛の字が好きなのか娘の名前に寛子と付けたそうです。

さて、今回は日本のワイン製造の概況を国税庁からこの 2 月に発表された「国内製造ワインの概況（平成 29 年度調査分）」を基に紹介します。国税庁ホームページは、次のアドレスです。

<http://www.nta.go.jp/taxes/sake/shiori-gaikyo/seizogaikyo/09.htm>

平成 30 年 3 月 31 日現在の果実酒製造場は 418 場で、うち 303 場（285 者）でワインを生産しています。果実酒の製造場は、367 場（H27）、368 場（H28）、418 場（H29）と毎年増えています。調査の回答者（285 者中の 247 者）の規模は、100kL 未満 206 者、100kL 以上 300kL 未満 22 者、300kL 以上 1000kL 未満 12 者、1000kL 以上 7 者の割合です。中小ワインメーカーが多い状況です。日本で製造される国内製造ワインは次の表のとおりで、この内の日本ワインは 17663kL となり、国内製造ワインの 20.2% を占めています。これを 300kL 以下の規模で見ると、日本ワインの割合は 8050kL 中の 7575kL で 94.1% となります。国内原料での製造割合が非常に高いことが分かります。

国内製造ワインの生産量 (単位：者，kL)

規模	～100kL	～300kL	～1000kL	1000kL～	合計
企業数	206	22	12	7	247
生産量（構成比）	4063（4.7%）	3987（4.6%）	7187（8.2%）	72088（82.6%）	87325（100.0%）
内日本ワイン（構成比）	3878（22.0%）	3694（20.9%）	4034（22.8%）	6057（34.3%）	17664（100.0%）

それでは、国内市場での日本ワインのシェアはどのくらいか？平成 29 年度の流通量の構成比は、輸入ワインが 68.4%，国内製造ワインが 31.6%（このうち 4.1% 分が日本ワイン）と推定されています。まだ、4% 位しかありません。この割合を増やすには販売努力も必要ですが、そもそもの原料ブドウの手当が必要です。栽培面積を増やすという地道な努力が欠かせません。また、国産生ブドウの品種では、白ワイン用は甲州、ナイアガラ、デラウエア、シャルドネ、ケルナー（上位 5 種）、赤ワイン用はマスカット・ベリー A、コンコード、メルロ、キャンベルアーリー、巨峰（上位 5 種）が多いのですが、ヴィニフェラ系の品種もかなりの品種が栽培されて使用されています。個人的には、日本ワインの増加とともに、どのようなブドウ品種のワインが増えていくのかに大変興味もたれます。4 月はブドウも芽吹く頃ですね。緑のブドウ畑も大変きれいだと思います。



酒質の個別相談の様子（2 日目）

話は変わりますが、清酒の新酒の時期となりました。お花見酒を楽しまれた方も多いと思いますが、3 月の 19 日～20 日に協会主催の第 23 回の杜氏セミナーを北とびあで開催しました。これは、吟醸酒の製造に関するセミナーで、この冬製造された吟醸酒のきき酒と専門家による個別の相談によって、酒質の向上を図っていくものです。1 日目は、全国新酒鑑評会の状況や「私の吟醸造り」と題した杜氏さんからの造りの話で、82 名の参加者があり満杯でした。2 日目は個別相談でしたが、今年の吟醸酒の酒質は、おだやかな甘みと吟醸香が調和した一品に仕上げられていたように感じました。